

愛媛で開催された 二つの大会から得たもの

平成20年の秋、愛媛において良かったと思えたことが二つあった。一つは、第31回全国町並みゼミ卯之町大会の運営にかかわることができたこと。二つは、第26回地域づくり団体全国研修交流会愛媛大会に参加できたことである。

町並みゼミは、歴史的町並みの保存・活用にかかわる人たちが、市民・行政・専門家それぞれの立場を超えて、まちづくりについて議論し、情報交換

をする大会であり、卯之町大会でも熱心な議論が交わされた。というのも「歴史のまちづくり」を取り巻く状況は日々変化しており、特に景観法や歴史まちづくり法などの法整備が進み、行政はもちろん、市民もしつかりと勉強しなければ、これからのまちづくりにつなげられないという参加者の思いによるものではないだろうか。

また、このゼミは市民組織の手作りゼミで、3日間延べ千人を超える参加者を受け



入れ、大会を運営されたことにも大きな意味がある。これは卯之町をはじめとする西予市民の歴史のまちづくりへの大きな関心と期待の表れであるし、全国の参加者へは、改めて町並みゼミの開催意義である「市民主体のまちづくり」を問い直すきっかけとなったはずである。

一方、地域づくり団体全国研修交流会では、「地域の宝物」について考えることができた。歴史のまちづくりだけでなく、地域には自然資源、農林業などの産業資源、そして人資源がある。たぶんまだまだ資源はある。

地域づくりとは、まちの資源探しであり、その資源を繋いで、そこから発信できるかである。資源探しだけでなく、そこからステップアップしないと地域の宝物にはならないのである。繋いで発信すること、これは市民だけでなく行政の役割も大きい。住民主体のまちづくりは行政との協働が欠かせない。



財団法人
日本ナショナルトラスト
専門研究員
住田 尚美



まちづくりは市民、行政どちらも必要なのである。

そして、二つの大会とも愛媛で開催されたことの大きな意義は、もちろん愛媛各地でのまちづくりを全国に発信することができたことであるが、全国の元気いっぱい、まちづくり実践者と地元愛媛の人たちが交流できたことが一番ではないだろうか。

交流は、情報を発信する力と受け取る力がないと成り立たない。受け入れた愛媛の市民たちは、この交流する力がますます強くなったはずであり、これからの愛媛のまちづくりに必ず活かされることを強く願う。私自身もほんの小さな一歩であるが、とにかくも一歩進めた気がしているのである。